

誰にでも心によみがえる、あの夏の景色、やさしい風。

あらたな時代のはじめての夏、

ここで懐かしいひとときを過ごしませんか。

ぽたい

源流のひとしずく



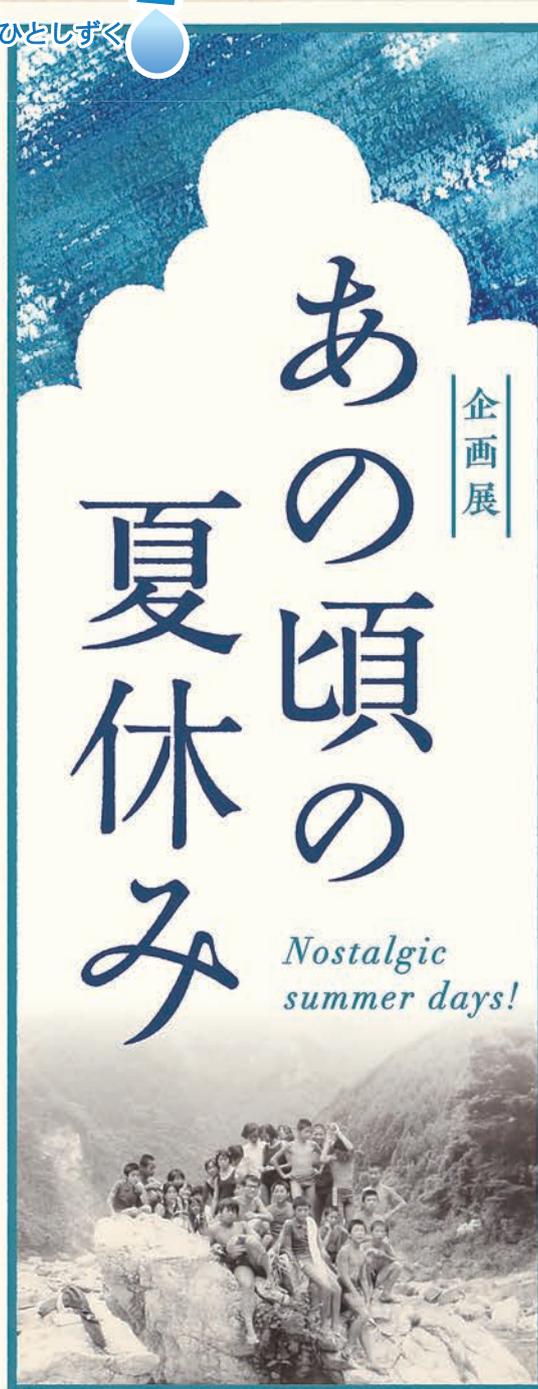
むかし遊び選手権



ノスタルジック
まち歩き



お昼寝 &
ラジオ体操



企画展

あの頃の 夏休み

Nostalgic
summer days!



“あの頃”の
はなしをしよう



昆虫採集



昆虫標本づくり

令和元年 6月29日～9月30日

CONTENTS

- ・ 事務局長コラム
- ・ 「源流学」 ⑩
- ・ 源流の主役たち
- ・ 吉野川のガタロウ
- ・ 吉野山のコケをしらべよう
- ・ ムネアカハラビロカマキリにご注意を
- ・ あの頃の夏休み作製秘話



森と水の源流館



公益財団法人吉野川紀の川源流物語
 住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
 TEL 0746・52・0888
 FAX 0746・52・0388
 URL <http://www.genryuu.or.jp>
 E-mail morimizu@genryuu.or.jp

企画展 あの頃の夏休みに寄せて

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大

「今年の夏は、胸まで熱い！不思議な、不思議な夏です！」…ご存知ですか？懐かしの歌謡曲、キャンディーズの『暑中お見舞い申し上げます』で書き始めました。というのもこの夏、森と水の源流館がいつもにも増して力を入れて取り組む企画展「あの頃の夏休み」が6月末からスタートしています。この企画展と関連イベントについては、後のページで触れるので、ここでは少し「おもい」を書かせていただきます。

ある日、あの頃の匂いがした。

昨年度から森と水の源流館に加わったスタッフ古山暁(38)。彼は昆虫が専門で、観察会の実施や、外来昆虫による地域環境への影響について啓発などを行っています。ある日、彼の席の後ろを私がすり抜けた時に懐かしい匂いがしました。小学生の頃に夏休みが近づくと、近くの文具屋などに置いてあった「昆虫採集セット」。そこに入っていた鮮やかな緑色と赤色の液体のボトル。あの匂いでした。

断っておきますが、彼とその液体とは何の関係もなく、私の勝手な幻想だったようです。そんな話から、スタッフそれぞれに、懐かしい「あの頃」の話が湧き出てきました。

みんなで盛り上げよう。

このプロジェクトの主担当は古山が担っています。昨秋から一生懸命におもい語り、呼びかけて、モノ集めにも取り組みはじめました。そんな彼を見てみると、あることが頭をよぎりました。「17年前の開館の頃には、慣れないスタッフが一丸となつて、いろいろなイベントに体当たりしていたっけ。いまはどうだろう？」決して手を抜いている訳ではないのですが、慣れに任せて仕事をこなしている毎日ではないか？ しかも、担当スタッフそれぞれが、それぞれにゴールを決めているので、みんなでゴールのテープを切るような感覚が久しくなかったのではと気づきました。「あの頃の夏休み」というキーワードに、スタッフ全員が

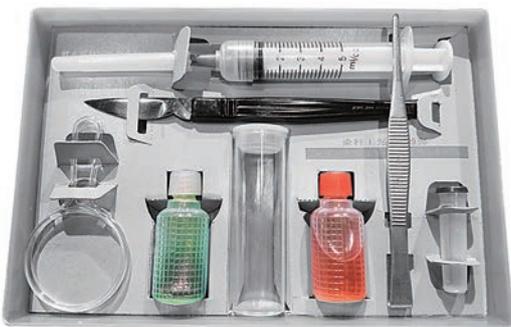
乗っかり、今年の事業を展開することになりました。そんな源流館がオープンした「あの頃」の感覚も大切な要素です。

予告と余白と余韻をもつて。

これも古山が発した言葉です。「村の人をはじめ、いろいろな人のかかわる、余白を大事にしたい。企画展終了後にも、継続する事業が残るような、余韻のあるプロジェクトにしたい」ディスカッションの中で、そのキーワードに、私はもうひとつ、文字は異なりますが「予告」を加えました。毎年、何をして「準備不足と予告不足」がわれわれの課題です。いくら意味のある催しを開いても、それを行うことが、適切な時期に伝えられなければダメだといつも思っています。なので今回は、告知、つまりポスターやチラシづくりにもこだわりました。「告知の段階から催しは始まっている！」それぐらいに告知には大きな意味がある！「広告業界でデザイナーとして私が社会人デビューをした「あの頃」に教えられたモットーです。

とにかく、ご来館ください。

実は、この原稿を書いているのは企画展スタートの1週間前です。「振り返るには、まだ早い！」ましてやタネアカシをする前に、楽しい企画展の準備に没頭しろとお叱りをいただきそうですが、森と水の源流館のひとつひとつの取組みには、実はそんなおもいが込められているということを知っていただいて、ご覧いただくには、よい機会だと思えます。いまここにいるスタッフそれぞれの「あの頃」をお伝えできるように頑張ります。



川上村の村井商店に今も残っていた「昆虫採集セット」ポスターでは、モノクロ写真に液体のボトルだけを着色しました。黒沢明監督の映画『天国と地獄』をイメージしてー

森

と水の源流館で、「あの頃の夏休み」という企画展がはじまっているそうなお。 「達ちゃん、なんか夏休みの思い出を語ってよ」と、職員からのリクエストがあったんで、今回は、わしが子どものころの夏休みの思い出でも語ろうと思う。 何度か、この源流学のところでも、夏の思い出を語つるがな。

と

いってもな、わしらの夏休みといえ、小学生のころは、学校から解放されて、毎日、川へ行って遊んどったけど、中学のころになったら、家の用事が済めへんたら、遊ばれへんだ。

ま

ずは家のことや。 麦の穂を白でついて実にしたり、畑仕事を手伝ったり、たきもの（薪）を作ったりして、自分らの暮らしを支えるための重要な戦力にされていた。 それわしらの家だけと違って、中学になると、どこの家でも、家の仕事をしてから、遊ぶのが当たり前だったわ。 それが終わったら、川へまっしぐらや。

川

といってもな、これも遊びと違うんやどお。 魚とったり、ウナギ獲ったりして、それが、今日の晩ご飯のおかずとして、あてにされてたんや。 よう行ったのが不動窟。 柏木から、まっすぐ山道を歩いて行くと、不動窟に降りる道があつてな、そこが、わしらの川遊びの定番やつた。

岩

の下の川底を目指して、ぐつと潜っていくと、魚がようおつた。 やけど、不動窟から出てくる水が、かげろうみたいになって時折、



ウグイ（奥の小さいのがカワムツ）

魚

魚が見えへんようになったり、その水が冷たいから、わしらは、「冷水（ひやみず）」といって、泳ぐのも気をつけてたなあ。 なんか、岩の下に潜っていくからはよ、出てこないと思がたりへんようになって、息をしようにも、上にあがっても岩に頭ぶつてるだけで、息もできへんし、必死こいて、岩の下を抜け出して、川面に顔を出したのを、よう覚えてる。

①9夏の思い出



達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」

大

ちくつと刺しやがって、ほんま痛かつたわ。 大きいのがつたら30センチぐらいのもおつたな。 40センチ近いのも獲ったことがある。 みんな遊びと違うねん。 おかずにとりについていた。 いまやつたら、川は危ないとか言われるけど、わしらは子どものころは、危ないことも楽しいことも経験を通じて、知った。

お

もろかつたのが、夜釣りや。 夜中に釣りにいくと、魚は逃げずに、寝とるんや。 ウナギも寝てて、動けへん。 寝とる間に、モリでぶす、ぶすつとついて、とるから、よう獲れたよ。「夜（よ）づき」夜（よ）づき」といって、でもな、やっぱり、夜に川に行くと気持ち悪くてな、身の毛がよだつ。 わしらは、川に顔を向けて魚、獲つとるけどな、後ろは、まったくの隙だらけや。 あたりは真っ暗やし、なんか気持ち悪かつたけどな、それでもよう獲れるから、みんなで行ったなあ。 でも絶対、ひとりではいかへんだ。

獲

った魚は、竹で編んだ「ビク」に入れた。 ビクは腰につけてるんやけど、手を突っ込んでないと、魚が逃げるし、獣がもつていく。「ビクが重たくなつたら気をつける」が合言葉やつた。 だいたいタヌキ

あ

か、キツネかなんやけど、それでも周りが暗い分、怖かつたなあ。 と川面ではな、松で作った松明をかたっぽで持つとらなあかんから、夜づきに行つた次の日は、腕が痛くて、たいへんやつた。 それでもたんと獲つたら、おかも喜んでくれるし、獲るのがおもしろいから、よう行つた。

今

の子どもらは、夏休みになつても、学校行つたり、塾行つたり、習い事行つたり、ほんま忙しい。 遊ぶといつても、遊園地やプールとかや。 自然のなかで遊ぶことは、人間関係やいろんな「学び」があることや。 今回、川の話をしたけど、わしらは、目の上の人のやることを、見よう見まねで、自分のものにしていった。 あかんだら、なんであかんだのか、自分で考えて身に付けていくもんや。 今回の源流館の企画展をみてもらいながら、いろんな体験をする夏であつてほしい。



ビク

大きな変化が生まれ、キツネに化かされる話がなくなったと言われている。そもそも日本人は自然の豊かさを享受しつつ自然を神として信仰して独自の自然と関係をつくってきた。しかし、高度経済成長期になると、農山漁村の人が出稼ぎで都会へ行き、人と自然の関係が変化した。また、テレビなどのメディアの発達や、高校・大学への進学率の向上、科学的なものの考え方を身につけることで、人を化かすキツネは非科学的な現象として扱われるようになった。つまり、農山漁村の衰退による人と自然との関係の変化と、科学的知識の広がり「キツネに化かされる」という非科学的な現象を見ることがなくなったと考えられる。この話を河童に置き換えると、川上村の人が近代化されることで、非科学的な存在のガタロは現れなくなったと言える。



写真2. 長殿の河原付近の現在

最後にガタロがなぜ長殿の河原（写真2）に出現したのかを考えてみたい。長殿の河原は、現在は大迫ダムで水没して見ることができないが、伯母谷川と吉野川の合流する、広い河原だったようだ。長殿の河原は誰も住んでおらず、入之波と大迫、伯母谷の集落に向かう分かれ道があったようだ。つまり、長殿の河原は大迫・伯母谷・入之波の集落の境界あたりだったと考えられる。では、集落の境界とはどういう場所なのか。この境界について右の図1を参照しよう。集落は、基本的にIの集落が中心に置かれており、集落から少し外側にIIの田畑があり、さらに外側にまきなどの材料になった集落の入会地（注釈）があったと考えられる。つまり、人が居住する場所は集落の中心地であり、そこから外に向かうにつれ人里はなれた場所になる。

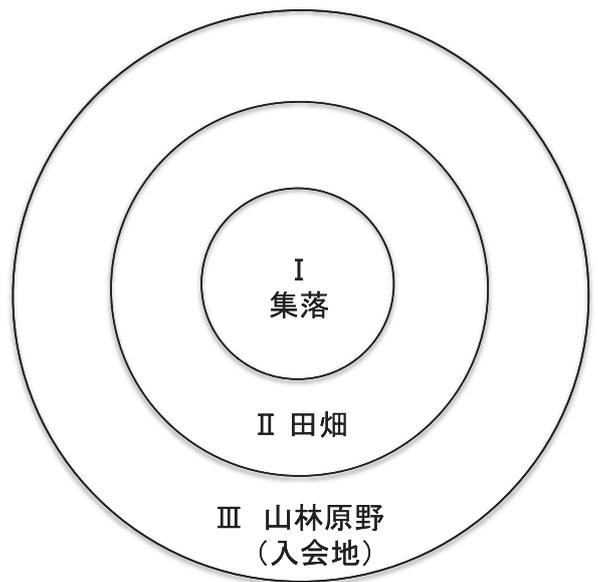


図1. 村の領域の模範図
〔福田（1982：38）を参照〕

これを入之波の河童退治の民話で考えると、民家のなかった長殿の河原は大迫・伯母谷・入之波の集落の境界であり、人が住む集落の中心地から離れた場所であったことが伺える。ガタロはなぜ長殿の河原に出現するのかという疑問に戻れば、集落の中心地から離れた長殿の河原は誰もおらずガタロにとって悪さをしやすい場所であったと言えるだろう。さらに言うならば、長殿の河原は人里離れた危険な場所だから、通るときは気をつけるようにという教訓を、河童退治の民話を語り継ぐことで残していたのかもしれない。

注釈 入会地とは、村や集落が村落共同体で共有している土地のこと。具体的にはまきや落ち葉を拾う里山や、屋根の材料となるカヤを刈り取る原野などのことで、共同体に属している人によって共同管理されている。

〔参考文献〕

内山節, 2007, 『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』 講談社新書.

奈良県教育委員会事務局文化財保存課, 1968, 『大迫ダム水没地民俗資料緊急調査報告書』 奈良県教育委員会.

福田アジオ, 1982, 『日本村落の民俗的構造』 弘文堂.



河童退治の民話からみるガタロの存在と住処の考察

奥田絵（川上村地域おこし協力隊／関西学院大学社会学研究科研究員）

入之波には大迫ダムで移転するまで、神社の境内に河勝様の祠があった。河勝様の信仰は、今でもこの集落に残る河童退治の民話に由来するものだ。話のあらまはこうだ。いたずら好きなガタロは長殿の河原で通りかかる人に悪さをしていた。これを見かねた村一番の力持ちのハイチロウは、ガタロを懲らしめようと相撲で勝負し、コテンパンにやっつけた。観念したガタロはハイチロウに悪さをしないから、その代わりに家の軒下にビクを吊り下げたら、そのビクにいっぱい魚を入れておくといいと言った。ガタロの言う通り、次の日からビクにいっぱい魚が入った。しかしある日、ある家がビクを吊り下げているタイが折れたので、代わりに鹿の角でビクをぶら下げたら、その日から鹿嫌いなガタロは魚を持って来なくなった。その代わりに、ガタロはハイチロウの子孫の家に秘伝の薬を置いていった。ハイチロウの子孫の家の女性のみこの薬を使えるそうで、この薬を塗るとどんな怪我でもすぐに治ったそうだった。また入之波では、河童を退治したハイチロウを讃えるため、集落の神社（大年神社）の境内に碑を建立して河勝様として祀っていた（奈良県教育委員会事務局文化財保存課 1968）。しかし、1973年の大迫ダム建設に伴って入之波が水没移転した結果、河勝様の碑は神社の境内から村外へと移されたそうだった（写真1）。



写真1. 水没移転後の大年神社

この入之波の河童伝説は、現在でもさまざまな逸話が残っている。この民話の語り手の方は、実際に自分の妹が骨折したが秘伝の薬を塗ってもらってすぐに怪我が治ったそうだった。また、語り手の方が学校に行く際は、長殿の河原を通らなければいけなかったため、後ろを振り返らずに走ってこの河原を通ったと話す人もいた。しかし、この河童退治の民話の語り手が3人ほどと年々少なくなっている。では、なぜガタロの語り手が少なくなっているのか。理由の1つに語り手の高齢化だ。語り手の人によれば、河童退治の民話は山仕事をしている際に、年配の方からよく聞かされたと話す。やまいきの間で伝承されてきたものだが、つまりやまいきの数が少なくなってきた、語り手が進んだことが理由の1つだと考えられる。しかし、語り手の高齢化だけではない。それはガタロが出現しなくなったことだ。語り手の方々はしばらくガタロを見ていないと口をそろえる。ある人によれば、大迫ダムで水没して以降と話すが、もっと前からいなくなったと話す人もいた。いずれにしても、ガタロが消えたことで民話を語り継ぐことができなくなったと考えることもできる。

ではなぜガタロが出現しなくなったのか。この疑問に対する解答として、高度経済成長期に建設された大迫ダムの開発がおこなわれることで河童の住処がなくなったと考えることができるだろう。しかし、そもそも妖怪や生き物にまつわる不思議な民話は、現在ではほとんど語られることがなくなったと言われている。たとえば、日本全国に残されているキツネに化かされるという話がそうだ。内山節（2007）によれば、キツネに化かされる話は1965年を境に語られなくなっていくそうだった。その理由として、近代化によってこれまでの日本人のものの考え方・見方に

吉野川紀の川「川べ隣」

吉野山のコケを しらべよう

5月7日 火

5月7日に吉野山にて16名の参加者で開催しました。昨年までは駅周辺で行いましたが、今年は山上で開催しました。講師の道盛正樹さん（大阪自然史センター）と木村が、当地でみられるコケを探しながら、みんなで観察しました。奈良県では古い石垣に特異的に生育する奈良県の絶滅危惧種のミヤマハイゴケや希少なオオミゴケなどが見つかりました。その他、植物学者でもあまり見た人がいないニワツノゴケもじっくり観察することができました。



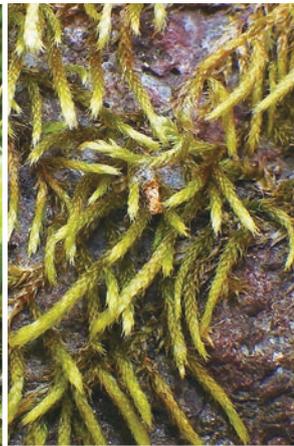
ここにもコケが！

〈観察したコケ植物〉

(蘚類) ナミガタタチゴケ、ホウオウゴケ、ハリガネゴケ、コツボゴケ、コバノチョウチンゴケ、カラフトキンモウゴケ、オオミゴケ、サヤゴケ、ヒジキゴケ、ノミハニワゴケ、ネズミノオゴケ、ヤノネゴケ、ケカガミゴケ、コクシノハゴケ、ミヤマハイゴケ(苔類) フルノコゴケ、ジシガサゴケ(ツノゴケ類) ニワツノゴケ



オオミゴケ



ミヤマハイゴケ



ニワツノゴケ

昨年10月に吉野町で外来昆虫のムネアカハラビロカマキリ(写真1, 2, 3)を確認しました。人には危害を及ぼさないのですが、在来種であるハラビロカマキリが影響を受けているとの報告がなされています。ムネアカハラビロカマキリの侵入経路は、東京都多摩動物公園と神奈川県立生命の星・地球博物館の調査により、中国産の竹ぼうきに卵鞘が付着して日本国内に侵入してきた事が判明しました。奈良県においても、量販店で販売されている中国産竹ぼうきからムネアカハラビロカマキリの卵が発見されました。(写真4)

安価な中国産竹

ぼうきは、短期的にみると使い勝手の良い製品です。使用頻度の低い一般家庭においては、値の張る国産品を使うより安価な中国産竹ぼうきを使うことは経済的だと思います。しかし、ここに落とし穴があるように思いませんか？



写真4 発見された卵

里山には色々な環境があり、そこから生活に必要な糧を得て日本人は生活して

きました。自然にある物を利用し、自然と共存してきた生活様式から、大量生産・大量消費の生活様式に変化した弊害の一端をムネアカハラビロカマキリは示しています。

里という字には「人の生活」という意味があります。人の生活のある山なので「里山」と呼ばれ、利用するために木を生やすから「林」という言葉がついた「里山林」という言葉が生まれました。竹林も里山林の構成要素の一つです。食料や道具の材料として利用されてきた竹ですが、近年は里山林の荒廃とともに放棄竹林が問題視されています。

里山林の管理の過程で生じた間伐材を利用した製品の中に竹ぼうきがあります。木工製品は手間とコストがかかるため、安価な大量生産品の台頭により敬遠され、衰退しています。木工製品の良さを環境問題を含めて見直してみる機会をムネアカハラビロカマキリは与えてくれたのかもしれない。



写真3 背面



写真2 側面



写真1 胸部

あの頃の夏休み
（開催中9/30）作製秘話

今年の企画展は色々な挑戦や実験の要素が含まれています。そもそも、昆虫担当が民俗学的な展示を作製することが挑戦です。しかし、チャレンジしないと前に進めない。きっかけは些細な事でした。しかし、投げられた石が作り出す波紋は徐々に広がり、やがて大きな波になっていきました。このビッグウェーブに乗るしかない！そう思い、自分にできることから始めていきました。

企画展を構成するにあたり、に自分の専門分野と「あの頃」をつなげるものは何かを探してみました。そうして思い出したことが、「遊び」でした。自然にふれる遊びをしていたからこそ今の自分がある。それならば、昔遊びを掘り下げていけば何か見つかるとか？と、遊び道具を調べていきました。

遊び道具を調べていくうちに、遊びには伝承があること、世代を超えて遊べること、知恵や工夫が必要なことが分かってきました。それならば、源流館の取り組みとリンクさせてしまえば、他施設にはできない源流館らしい展示ができるのではないだろうか。ESDの視点で「あの頃」を振り返れば、持続可能な社会をつくるきっかけになるのではないだろうか。そうして出来上がったものが3階

フィールド体験コーナーに設置した「源流学の視点から」「木づかい」「温故知新」の3枚のパネルです。

企画展構成を考え始めた当初、企画展は「一カ所にまとめて展示物やパネルを設置するものだと考えていました。どこに設置すれば意図が伝わりやすいか、常設展示を見ながら動物園のクマのように館内をウロウロ歩いていました。館内を3周ほど歩いたところで、村民さんから「あの頃」を聞き、村の暮らしや文化を紹介していけば、森と水ともに生きてきた川上村の魅力の発信にもつながると思いつきました。そうしたことから、源流館全体を使い、常設展示から「あの頃」を引き出せるように企画展を構成することにしました。

展示を作製するにあたり、展示のストーリーを考えました。天明の家で「家族のだんらん」、交流広場で「町角遊び」、フィールドをめぐる「野外遊び」、フィールド体験コーナーで「体験に基づいた暮らし」をテーマにし、家から外へ遊びに行くイメージで展示を構成しました。

企画展「あの頃の夏休み」は、多くの人の協力があって開催することができました。これは、源流館が川上村のために行ってきた活動があったからこそです。村民さんとの距離が近いからこそ、思い出話を聞くことができ、蚊帳や花柄の魔法瓶、木製の牛乳受けといった「あの頃」の製品をお借りできました。

企画展は始まったばかりですが、完成にはまだ時間がかかります。なぜならば、企画展を見た人から得られる思い出話やアイデアを取り込んでいける余白を残しているからです。みんなで作り上げる企画展もテーマの一つとしていますので、是非ご来館の上、あなたの思い出を企画展に加えていってください。

会員証変更のお知らせ

平素は当会の活動に格別のご理解とご協力ならびに森と水の源流館をご利用いただき誠にありがとうございます。さて、当会の会員証が新しく吉野杉の間伐材を加工したカードに変更となりましたのでお知らせいたします。吉野林業は極端な密植と弱度の間伐を数多く繰り返し、長い期間をかけて施業します。そのため、年輪幅が小さく、均一なうえ、真っ直ぐで節がなく、色の美しい吉野杉や檜は市場で珍重されてきました。とくに、吉野杉は酒樽・樽丸づくりになくはならないものです。そして、保水性と透水性の高い土壌や年間2,000mmを超える降水量といった川上村の自然環境と、500年以上も昔から受け継がれてきた優れた技術によって育てられます。その吉野杉を薄くシート状に加工したものが、この会員証です。一般社団法人吉野かわかみ社にて作っていただきました。1cmあたり7~8年輪以上入っているものが理想とされています。また、色や香りなど、実際に手に取って確かめてみてください。すでに旧カードで発行した方につきましては、今回新カードを同封しております。



源流人募集

源流人とは かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは 集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金 にご協力ください

ありがとうございました。平成30年度、225,571円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしく願います。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

